

第七期第2 卷

◆ 太陽陽明合病桂枝加葛根湯証

傷寒の伝経は太陽から陽明に移行するが、この二経の病はつねに互いに関連があり明確に二分できない。太陽病に陽明病を兼ねる場合は、太陽が徐々に陽明に入るもので、桂枝加葛根湯が主る病である。

《傷寒論》原文：太陽病，項背強^{しゆしゆ}ばること几^し几^し，反^{して}汗出^るで惡風するものは桂枝加葛根湯これを主る（14）。

【桂枝加葛根湯方】

桂枝 3 両（皮を去る） 芍薬 3 両 甘草 2 両（炙） 生姜 3 両（切る） 大棗 12 枚（擘く） 葛根 4 両

上 6 味，水 7 升を以て諸薬を納れ，煮て 3 升を取り，滓を去り，1 升を温服し粥^{もち}を啜^するを須^{もち}いず，余は桂枝法の将息及び禁忌の如くす。

王和安〔湖北省蕪湖の老中医（1872～1959），《傷寒論新注》《金匱要略新注》を著す〕は「手陽明経は大腸を根とし出て胃に絡し，肩背に外出して督脈に合す，その気は大腸胃外の油膜より水を吸して化し，本経を循って肩背に上出する。葛根は純粹に膜絲管の組織であり，性質はよく水を吸い，最も深く土に入り，土の下にある黄泉の水を吸引し，気に化し脂に結して，長藤支絡を上昇する。これは陽明経の性質とぴたりと一致し，気味は輕清でとりわけ解熱に長じるので，元の張元素は葛根を陽明の仙薬とする。この方は桂枝湯で太陽中風の本病を治し，葛根を加えて陽明経の兼病を清解し，同時に陽明経の鬱熱を化して清陽とし，生姜・桂枝の力でこれを引き，太陽の司る營衛に従って出す。葛根の分量

が突出して多いのは、生姜・桂枝の熱が弊害をおこさないように監制するためである。粥を啜る必要がないのは、葛根が養液するので穀力の助けを必要としないためである」と述べる。傷寒の病は手経足経いずれもあるが、手足の経は本来隣接し明確に分けられない。そこで張仲景は著書でも某経というだけで手足の区別を明確にしていない。私は第1課のはじめの節でこれを詳しく論じた。王氏は本方の解説に手経〔手陽明大腸経〕から論を立てるが、本来《傷寒論》もその意味を含むので、特別な創見であると訝しむには及ばない。

張拱端は「太陽の経は風府と連絡し、頭項に上り脊を挟み、腰に^{いた}抵り、足に至って身の背を循る。本論で論じる太陽経病はほぼ3種の症状があり、一に頭痛、二に項強、三に背几几である。頭・項・背の3つの部位は一脈が貫くので、やはり頭項強痛は項背強几几の関連句であり、太陽の経脈で背を行って頭に上るのであるから、一箇所とは限らない。上節〔「太陽病、頭痛、発熱し、汗出て、悪風するものは、桂枝湯これを主る(13)」を指す〕が頭痛をいうに止めたのは経病の軽症であるためで、この節に項背強几几とあるのは経脈に受けた邪がより重いことを読者は知るべきである。《内経》には「邪輪に入れば、腰脊乃ち強ばる」という。いま邪が太陽の経輪に入ったので、項背は几几と強ばることになる。邪の侵入路を考察すると、風池〔足少陽胆経〕から入り、上って脳をおかさずに下って背をおかすので、頭は痛まず項背が強ばる。また汗出悪風証にもとづくと、邪は経輪に入るだけでなく肌肉に入ったので、桂枝湯で解肌し、葛根を加えて経輪に達して項背几几の病を治療する」と述べる。

愚按：太陽は皮毛を主り、陽明は肌肉を主る。人身の筋は肌肉中に絡し、肌肉に熱があると、筋が熱に^{しやぐ}鑠されると拘攣し、それは羽の短い鳥が飛翔できずに頸を伸ばしている様に似ており、几几はその状態である。葛根の薬性はよく酒を醒まし（葛花が最もよく、古には葛花解酲湯〔《蘭室秘蔵》木香・人參・猪苓・茯苓・陳皮・白朮・乾姜・神麴・沢瀉・青皮・縮砂・白豆蔻・葛花〕がある）、涼で散であることを知るべきである。さらに胃中の津液を鼓舞上潮して消渴を止める。陽明病の治療に用

いるのは、陽明腑中の気化を借りて、陽明在経の邪を駆逐するので、自ずと容易に奏功するからである。

◆ 太陽陽明合病葛根湯証

桂枝加葛根湯は太陽に陽明を兼ね有汗のものを治す。太陽に陽明を兼ね無汗なら、《傷寒論》にはまた別に治法がある。それが葛根湯である。

《傷寒論》原文：太陽病，項背強ばること几几，汗無く，惡風するものは葛根湯これを主る（31）。

【葛根湯方】

葛根 4 両　麻黄 3 両（節を去る）　桂枝 2 両（皮を去る）　芍薬 2 両　甘草 2 両（炙）　生姜 3 両（切る）　大棗 12 枚（擘く）

上 7 味咬咀し、水 1 斗を以て先ず麻黄、葛根を煮て 6 升到減じ、沫を去り、諸薬を納れ、煎じて 3 升を取り、滓を去り、1 升を温服する。覆い微似汗を取り、粥を啜るを須いず、余は桂枝湯法の将息及び禁忌の如し。

陳古愚は「桂枝加葛根湯とこの湯は、ともに太陽経俞〔経穴の俞穴〕の病を治す。太陽経俞は背にあり、経に「邪俞に入れば、腰脊乃ち強ばる」という。師は二方のいずれも項背几几を治すというが、几几は羽の短い小鳥が飛ぼうとして飛ぶことができず頸を伸ばすさまである。ただ桂枝加葛根湯方は汗出るものを治し、これは邪が肌腠から俞に入るので、桂枝が主る。葛根湯方は無汗を治し、これは邪が肌表から俞に入るので、葛根が主る。しかし邪が俞に入れば肌腠も病む、方中には桂枝湯の全方を取り葛根・麻黄を加えてやはり肌表両解の治とし、桂枝二麻黄一湯と同じ方意で用いるが、ごくわずかな違いがある」という。

◆ 陽明病葛根黄芩黄连湯証　自訂の滋陰宣解湯方を附す

上述の二方〔桂枝加葛根湯と葛根湯〕はいずれも太陽と陽明の合病の治方である。もともと太陽に属する病を誤治したために陽明に純属することがあり、これが葛根黄芩黄连湯の主る病である。

《傷寒論》原文：太陽病，桂枝証，医反ってこれを下し，利遂に止まず，

脈促なるものは、表未だ解せざるなり。喘して汗出るものは葛根黄芩黄连湯これを主る（34）。

【葛根黄芩黄连湯方】

葛根半斤 甘草2両（炙） 黄芩3両 黄连3両

上4味、水8升を以て、先ず葛根を煮て2升を減じ、諸薬を納れ、煮て2升を取り、渣を去り、分ちち温め再服す。

促脈は結脈・代脈のいずれとも同じではない。多くの注釈家は脈動が速くときに一時止まるものを促とする。促脈は速脈中にあらわれることが多いが、じつは止まるわけではない。人が道を歩くのにたとえると、歩いては止まり、少し止まっては一步また進む、これが結、代である。人が疾駆するのにたとえると、急いで疾走して、道路にたまたまでこぼこがあると、足下にくいちがいを生じることが多いので、その歩武〔わずかの隔たり、歩は5尺、武は半歩〕を調整するが、同じように疾駆して止まらないのが促脈である。そこで促脈は速脈中にあらわれることが多い。これらの脈は外感の熱の内陷によることが多く、脈の拍動を促して加速し、脈管が充満してくると間々この象があらわれるので、これを促と称し、人が催促されるようである。したがって方中では大量の黄芩・黄连で下陷の熱を化し、清軽透表の葛根を用いて、化して散じようとする熱を引いてことごとく外達し、表裏ともに清する。さらに喘は肺病、汗は心液であり、下陷した熱は促脈の拍動を変化させ、さらに心肺の陽を迫して外越させるので、「喘」かつ「汗」になる。したがって方中の黄芩・黄连は外感内陷の熱を清すだけでなく、心肺の熱をも清すので、汗・喘は自ずと癒える。まして黄连の薬性は厚腸にはたらき下利の要薬でもある。服薬後も余熱で利が止まない場合は、私が創製した滋陰清解湯（前三期合編第5巻にある。滑石・山薬各1両、生白芍1両、甘草3錢、連翹3錢、蟬退足土を去る3錢）で治療するといふ。

陸九芝は「温熱と傷寒との違いは、傷寒には悪寒があり、温熱は悪寒がないことだけである。悪寒は太陽の主証であって、悪寒しないのは陽明の主証で、張仲景はこれを最も厳格に区別する。悪寒があり無汗な